

幼児教育における「遊び」の変遷：幼稚園教育要領の内容分析から

紺谷 遼太郎 くらしき作陽大学 子ども教育学部

はじめに

一般に幼児期の遊びは、子どもの学習・発達と結びつく活動として広く受け入れられ、重要な教育方法として扱われている。現在施行の2017年幼稚園教育要領においても、「幼稚園教育の基本」として遊びが重視されており、その中で遊びは、「幼児の自発的な活動」であり「心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習」と捉えられている。

一方で、このような遊びの見方が、子どもたちの実際の発達や学習において真に意義のある影響を与えることを期待するのであれば、それと同時に、慎重な吟味の対象とみなされる必要がある。なぜなら、遊びを正確に捉えようとする試みは、しばしば遊びを理想化するイデオロギーのもとで行われ、かえって困難になってしまうからである。現代の遊び研究において子どもの遊びは、知識や創造性、社会性、運動機能など心身のあらゆる側面の発達の中であり学習の場であるという先見的な価値観に縛られている可能性がある(Lillard、2015；中野、1996)。

このような議論を踏まえると、今日の幼児教育における遊びの意義と課題を適切に理解し生かすためには、幼児教育において遊びがどのように位置付けられてきたかを明らかにする試みが必要であると考えられる。

目的

幼稚園教育要領（以下、要領）において遊びがどのように位置付けられてきたか、また、現在の要領において「遊び」という語が担っている意味を明らかにし、今後の幼児教育における遊びの研究課題を引き出す。

方法

- ① 1956～2017年の要領とその解説書をテキストデータ化
- ② これらの要領をⅠ期：系統主義的保育期（1956年、1964年）、Ⅱ期：児童中心主義的保育期（1989年、1998年、2008年）、Ⅲ期：統合期（2017年）に分類
- ③ それぞれの期の特徴的な要領とその解説書（Ⅰ期：1964年、Ⅱ期：1998年、Ⅲ期：2017年）における遊びに関する記述の抽出
- ④ テキストマイニングソフト（KH Coder）を用いて、それぞれの期における記述内の特徴語や共通点の導出

結果

(1) 各期の特徴語（表1）

Ⅰ期：幼稚園教育として望ましい遊びと、そうした遊びでの子どもの姿の記述

Ⅱ期：遊びにおける物的・人的環境に関する記述

Ⅲ期：Ⅱ期の記述 + 遊びにおける社会性に関する記述

(2) 各期の「遊び」の記述の共通点と特徴（図1）

3期に共通：

遊びが子ども自身の興味に沿って行われる活動であるという記述や、遊びを通じた発達・学習への言及

Ⅰ期：

幼稚園教育における望ましい遊びが、具体的な子どもの姿とともに示され、そうした遊び方によって子どもの様々な態度や能力を育つという位置付け

Ⅱ期以降：

遊びは、用具や素材といった物的環境や自然環境、あるいは友達などの人的環境など、様々な環境と「関わり」をもつことに発達上の意義があるという位置付け

加えて、子どもが興味・関心を持って遊ぶことができる環境を教師が整えるという教育方法上の遊びの記述

Ⅲ期：

友達と「一緒」に遊ぶことやその中で友達の「気持ち」に「気付く」など、遊びを通じた子どもの社会性や人間関係の発達に関する記述

表1 期別の特徴語とJaccardの類似性測度

Ⅰ期（1964年要領・1968年指導書）		Ⅱ期（1998年要領・1999年解説）		Ⅲ期（2017年要領・2018年解説）	
特徴語	Jaccard係数	特徴語	Jaccard係数	特徴語	Jaccard係数
遊ぶ	.305	生活	.225	遊び	.344
作る	.157	遊び	.202	生活	.305
行う	.147	教師	.198	教師	.294
色々	.140	自分	.193	自分	.275
多い	.126	様々	.188	体験	.263
使う	.123	展開	.187	様々	.257
遊べる	.109	環境	.181	関わる	.242
態度	.108	関心	.165	環境	.222
鬼	.099	発達	.162	友達	.213
養う	.098	十分	.155	関心	.174

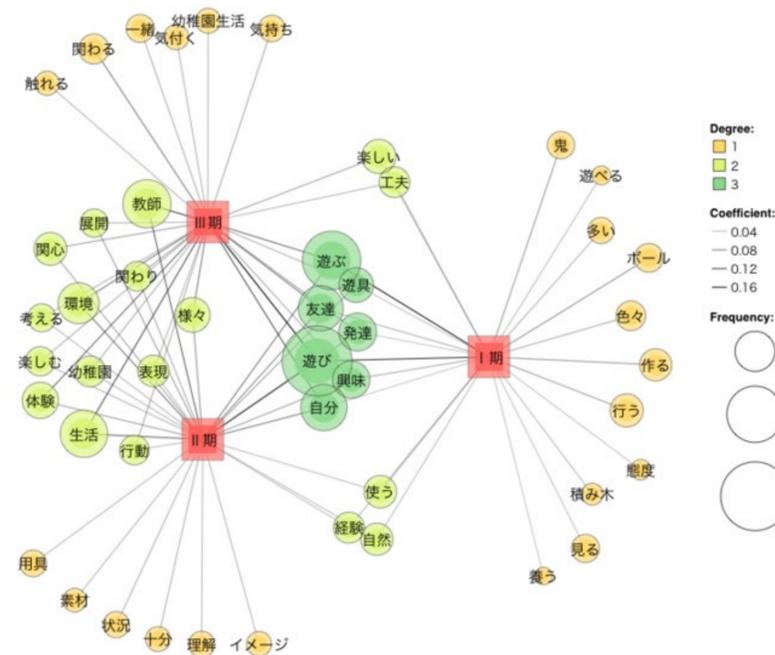


図1 期別に見た抽出語の共起ネットワーク

考察

- 戦後幼児教育において、遊びが子どもの諸能力の発達を促す教育方法と捉える点、遊びが子どもの興味を前提とする点は共通

Ⅰ期：子ども自身の遊ぶ態度の充実の重視

- 子どもの遊びに対する教育方法上の記述が少なかったがゆえに、遊びは教師が主導し子どもに指導する学習活動（中沢、1996）として位置付けに？

Ⅱ期：環境との相互作用の充実の重視

- Ⅰ期の結果起こった教師の指導性重視の教育へのカウンター

Ⅲ期：特に人的環境との相互作用の充実の重視

- 教育方法という点では、Ⅰ期よりⅢ期の方が、幼児教育としての望ましい「遊び方」に縛られているともいえる。

課題

- 遊びの教育評価の観点

- 遊びをめぐる子どもの行動について、「気付く」「関わる」「触れる」などの抽象的な表現が目立つ。こうした表現は、遊びとそれらの発達がどう結びつくのかを評価する評価言語として不十分である。遊びを教育方法として評価するならば、具体的な教育評価の基準や指標の確立が求められる。

- 幼児教育としての遊びを語ることの限界

- 一方で、そうした教育制度上の遊びの意義を重視するあまり、遊びそのものの意義を見失わないようにする必要もある。遊びと能力育成を関係づけることを前提にすることで、どのようなロジックに縛られてしまうのかを検討することが求められる。